

パラグアイにおける二ヶ国語併用状況

峯 正 志

1. はじめに

平成4年12月21日から平成5年1月8日にかけて、筆者は非常に個人的な理由から南米のパラグアイを訪問する機会をもつことになった。パラグアイといえば、社会言語学の文献でしばしば言及されている国である¹⁾。ご存じのように、スペイン語、ワラニー語(guaraní)²⁾の2ヶ国語がともに使用されているからである。

パラグアイという国は、日本人にとってあまり馴染みの無い国である。そのため、パラグアイの日常に関する記述は日本ではあまり見ることができない。まして、そこで用いられているワラニー語と呼ばれる言語が一体がどんなものか、どのように使われているのかについての記述は、一部の専門の言語学者を除いて、ほとんど見ることができないであろう。筆者は古代メソポタミアのシュメール語が専門で、ワラニー語に関してはほとんど素人同然の知識しかないが、このような現状を考えると、素人の報告でもいささかの価値があるのではないかと考え、このような報告を書いた次第である。これは論文ではないので客観的な記述だけでなく、筆者の主観的な記述も交えてある。その点ご容赦願いたい。しかし、主観的な記述においても、この報告で用いた例はすべて筆者が目で見、耳で聞いたものである。

2. パラグアイについて

パラグアイは南米の中央に位置する日本とほぼ同じ面積を持つ国である。まわりはブラジル、アルゼンチン、ボリビアに囲まれている。人口は、ほぼ450万人。亜熱帯に属する気候で、私が訪れた12月から1月にかけては盛夏で大変暑かった。首都はアスンシオン(Asunción)で人口約60万人。その他の町はあまり小さくなく、アスンシオンが唯一の都市といってよい。筆者が見て感じたパラグアイの印象は、日本の昭和30年代の生活と同じだなというものであった。非常に主観的な印象で、具体的な根拠を聞かれると困るのだが、ボンネット・バスが走っていたり、電話があまりなく、お隣さんに電話を借りに行ったり、氷で冷やした炭酸飲料の露店がたくさんあったりというふうに、筆者がこどもの頃に経験した昭和30年代後半の日本で見られたような光景を多く目にし、非常に懐か

しいという思いを抱いた。

3 ワラニー語について

ワラニー語は、現在でこそ白人にも用いられているが、もともとパラグアイの原住民の言語で、言語的には *tupí guaraní* 語族に属す。もちろん印欧語であるスペイン語とは、系統的に関係ないし、また言語構造の点でも全く異なる言語である。

ワラニー語は公用語 (official) ではなく、国語 (national) として用いられている。Canese (1983: 16) によると人口の約94%の人々によって話されているとあるが³⁾、当然のことながら、個人個人でその習熟度にはかなりの差があるように思われる。

例えば、ある人に聞いたところ、自分のスペイン語の習熟度を100%とすると、自分のワラニー語の能力は50%ぐらいだと答えた。

また、ある老婦人は、自分の娘がワラニー語をあまりよく話すことができないとこぼしていたが、その人の娘はワラニー語を話すことができるのである（私は実際にその人が話すのを聞いたことがある）。従って、この女性のワラニー語の習熟度もそれほど高くないということになる。このように、「人口のほとんどの人が話せる」と言われていても、みな流暢に話せるというわけではないのである。「～%の人が話している」というような記述を見ると、いかにもそれらの人がすべて同じような流暢さで話しているような印象を抱くが、現実はそうではなかろう。もっとも、私の会ったこのような人が、ワラニー語を話さない数パーセントの人のなかに数えられていないという保障はないが。

このように、ワラニー語は、アメリカインディアン諸語の中では比較的多くの言語人口を持つ言語である。ちなみに、三省堂言語学大辞典に、「パラグアイに暮らす約1万人の日系人のあいだでも、スペイン語とならんで、ワラニー語がある程度普及しているようである。」という記述があるが、筆者はあるパラグアイ人が、「日本人（筆者：日系パラグアイ人）もパラグアイに多く住んでいるが、彼らはなかなかワラニー語がうまい。」と言うのを実際に聞いた。しかし、実際に日系人たちがどのような場面でワラニー語を用いるのかという点については、日系人の家庭を訪れることがなかったため確認できなかった。

最後に、一般にパラグアイの人々は、ワラニー語は外国人には難しい言葉だと信じているようであった。私が会った人々のなかで、ワラニー語がやさしいといった人は一人もいなかった。すべて「スペイン語はやさしいが、ワラニー語は大変難しい」というようなことを私に語った。このような、彼らがワラニー語に対して持つ意識は、日本人が日本語に対して持っている意識と似ているように思われた。パラグアイでのワラニー語の社会的地位をいくぶんかでも語っているのではなかろうか⁴⁾。

4 使用状況

第3節で述べたように、個人のスペイン語なりワラニー語なりの習熟度が異なっている

ため、どの言語が用いられるかということも、社会的状況よりも、その個人の言語習熟度に左右されることが多いように思われた。

例えば、アスンシオン市内にはスペイン語しか話せない人もいる。アスンシオン空港内の、ある航空会社のカウンターの女性は、ワラニー語で話し掛けた客に対して、「ワラニー語は話せない」とスペイン語で答えている（ちなみに、その態度は、ワラニー語が話せないことを恥じている感じではなかった。）。また、筆者はアスンシオンからバスで5時間くらいの田舎を訪れたが、そこで会った88歳のお年寄り（白人で、原住民ではない）は、スペイン語が全く話せなかった。また、そこの使用人（白人ではなくメスチーソ）の親子も、ワラニー語しか話せなかった。このような場合には、用いられる言語は社会的状況に関わりなく決まるであろう。

さて、問題は、どちらの言語も一応使うことのできる人間が話す場合に、どちらの言語が用いられるかということである。しかし、これに関しても上で述べた「その言語の習熟度」が重要であるように思う。その意味で、その人が都市に住んでいるか、田舎に住んでいるかという点は、かなり大事な点であると思われる。つまり、都会にはスペイン語が得意な人が多く住み、田舎にはスペイン語よりワラニー語のできる人が多く住んでいるように思えるからである。

あるパラグアイ女性は、田舎に生まれたが（日本人である筆者の感覚では、「田舎」という言葉よりも、「自然の中で」と言ったほうが適切であろう。）、生まれてから6才まではワラニー語のみで育ち、スペイン語は学校教育の中で（そのため、「村（pueblo）」に引っ越したという）学んだそうである。それぐらい、田舎ではワラニー語が優勢なのである。従って学校教育を受けられない子供（数パーセントいるという話を聞いた）、または本当に田舎の学校へ通った子供は、ワラニー語しか話せないことになる。ところが、アスンシオンから約15キロのサンロレンソという町に住む現在6才の女の子はほとんどワラニー語ができない。これら都会の子供は、先の女性と異なり、勉強しなければワラニー語を話せるようにはならない。この子供の祖父母は、スペイン語よりワラニー語の方がよく話せるのだが、孫娘がスペイン語しか話せないため、会話にはスペイン語を用いていたようであった（もっともその孫娘も、あまり話せないながら、聞くのなら、簡単なことであれば少しは分かるらしい）。

さて、次に大事ななのは、言語の使用場面が、公的なものか私的なものかという点であろう。スペイン語もワラニー語もある程度（流暢でないとしても、意思の疎通に支障の無い程度）出来る人どうしが話す場合、まずこのことが影響していると思われる。

まず、公的な場面から見てみよう。ここでは、ほとんどスペイン語が用いられるようであった。つまり、相手がワラニー語しか話せない場合以外は、すべてスペイン語になるようである。

まず、パスポートなどを発行する役所。日本と違い、堅苦しい感じはあまりしなかった

(役所なのに、アメリカ合衆国のポップ・ミュージックが大きく流れていて驚いた)が、ここではすべてスペイン語が使われていた。公証人の事務所でも、すべてスペイン語であった。いろいろ雑談もあったようだが、すべてスペイン語であった。教会において結婚式についての事務的話をするときもそうであった。結婚式のときの神父の言葉はすべてスペイン語。結婚手続きは、日本と異なりなかなか手の込んだ行事である。役人の前で書類にサインをするのだが、そのときにいろいろ結婚についての話をされる。この手続きは田舎で行なわれたが、その話はすべてスペイン語であった。レストランや喫茶店で注文をするとき、またお店や市場で買物をするときもスペイン語であった。患者が医者に病気の様子を知らせたり、医者が患者に説明するときもそうであった。職場のミーティングもすべてそうであった。

このような場面ではワラニー語は聞かれなかった。すべてスペイン語であった。もっとも、これらはすべて首都アスンシオンで見聞きしたことであるので、田舎で同様の場面でどちらの言語が用いられるか調べなければ正確なことは言えないが。

一方、私的な場面ではどうであろうか。近所の人との会話は、比較的ワラニー語が多く用いられていたようであった。先程出たサンロレンソという町(決して田舎ではない)でも比較的多く聞かれたところをみると、私的な会話ではワラニー語もかなり用いられるようである。しかし、若い人はどちらかというところほとんどスペイン語で話していたように思う。ワラニー語で話しかけられていても、スペイン語で答えていたようだ。これら若い人は、ワラニー語の習熟度に(上に書いたように)バラツキがあるのであろうか。

友人との会話は全くいろいろなケースがあった。職場での私的会話はスペイン語の方が用いられるようである。というのは、職場ではスペイン語で話していた2人が、ある商店の中で出会って雑談をしたときは、ワラニー語を使っていたからである。

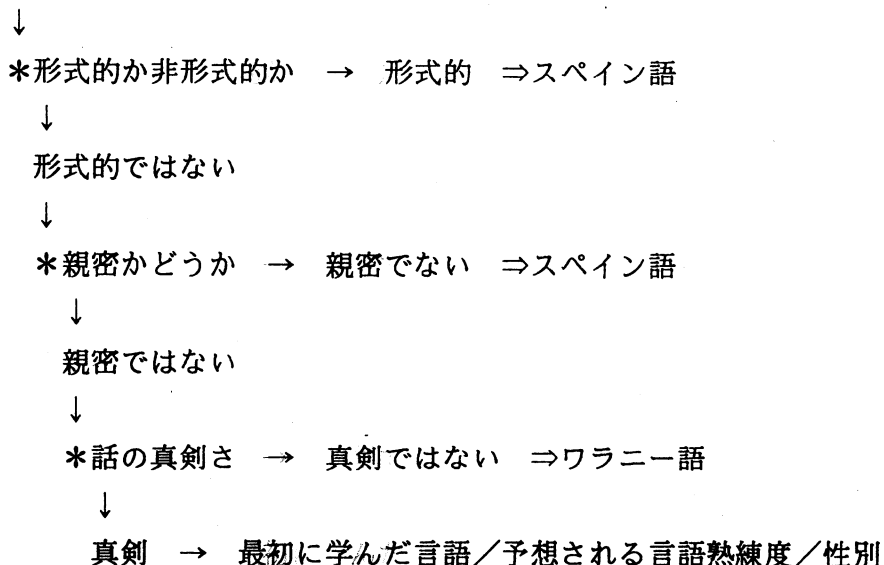
家族との会話は、スペイン語だけのこともあったし、ワラニー語だけのこともあったしまたスペイン語とワラニー語が併用される場合もあった。ここでも、一方がスペイン語で話しかけているのに、もう一方はワラニー語で答えたり(またはその逆)することがわりと多く見られた。

どういう場合にスペイン語が、どういう場合にワラニー語が用いられるかという、ここで扱った問題については、Fishman (1972: p.86) に、Rubin (1968) から転載した図が載っているが、そこに書かれた流れ図(フローチャート)は、筆者がパラグアイで見聞した事実とよく合っているように思われる。パラグアイに出発する前は、この流れ図の不備な点を指摘してみようなどと考えていたが、無理であった。参考までに、その図を下に簡単に図示する。

*場所 → 田舎 ⇒ワラニー語

↓

田舎ではない



5 おわりに

今回の報告は、筆者のスペイン語・ワラニー語の知識が十分でないうえに、パラグアイの言語学関係者にも会うことができなかったため、表面的な観察で終わってしまった。しかし、これからも同国を訪れる機会はたびたびあると思われるので、その都度観察を深め報告していきたいと思っている。

註

- 1) 例えば Fishman (1972) (日本語訳 p.85ff.) や、Schlieben-Lange (1973) (日本語訳 p.133) 等。
- 2) この言語は、日本語では「グアラニ語」「ワラニ語」など様々に表記されるが、ここでは、三省堂言語学大辞典に従って「ワラニー語」とする。
- 3) 三省堂言語学大辞典では「同国総人口の実に95%以上を占める」とある。
- 4) Fishman (1972) (日本語訳 p.85) には、「他方、都市住民の大多数（いなかから来て比較的新しい）は、彼らがあとで獲得したスペイン風の都会生活の中でも、親密さやもとの集団内の連帯にかかわることをあらわすために、グアラニ語を維持している。」とある。また、Schlieben-Lange (1973) (日本語訳 p.133) にも「言語少数派の場合、ないしは民族語と国家語が一貫して二本だてとなっている（たとえばパラグアイのような）場合には、自分たちの言語と国家語とが相ことなるかたちで象徴的な価値をあたえられる。すなわち、国家語は（外側の権力を象徴し、自分たちの言語は集団のアイデンティティーを象徴し、集団の連帯感のもとになる。」とある。両記述とも、「連帯感」を表すために用いられているとしている。筆者もそのような感じを受けた。

引用文献

Canese, Natalia Krivoshein de 1983 *Gramatica de la lengua guaraní*. Asunción.

Fishman, Joshua A. 1972 *The Sociology of Language*.

(日本語訳：湯川恭敏訳 『言語社会学入門』 大修館書店)

Schlieben-Lange, Brigitte 1973 *Soziolinguistik - Eine Einführung*. 第2版

(日本語訳：原聖・糟谷啓介・李守訳 『社会言語学の方法』 三元社)